

史料報

第 23 号

昭和50年12月

古文書と私

相 原 隆 三

1

近世地方文書のうち村役文書は村役人の家に襲蔵されていることが多いので、古文書の残っているような家は大体見当がつく。但し幕末から百年以上もたった現代生活との関係はなくなっているの、旧家を訪ねれば古文書が見せてもらえるものでもない。あるにもかかわらず見せたがらない家も多いし、全然知らないとか答える家や、話には聞いているが見たこととはない、あるいは前に見たことがあるが最近は何処にあるのかわからないと答える家も多い。

もっとも特別の理由がなければ汚くて邪魔になるだけの古文書を住宅に置いておく家はなく、あるとすれば倉の中で、子供のころ倉の中で遊んでいたとき見たことがあるが、現

在は見当らないので出てきたら連絡しましょうと親切に答えてくれる家も多い。倉とは品物をしまっておく所で中の品物は動かないような気がするが、必要に応じて出し入れしているうちに、不要な品物は奥へ奥へと動き、他の品物が上へ積みかさねられていく。古文書はその不要品の代表ともいうべきもので、とくに整理される運命にあったのであろうが、何となく貴重な内容、歴史の本にしか出てこない古い年号、読めない文字があたえる宝物のような神秘さなどが尊ばれて、捨てるに捨てきれず現在まで残されてきたのかも

れない。最近、古文書の発見例が多くなってきたのは歴史ブームにもよるが、現代生活から倉が不要となり取こわされて品物を整理しているう

目 次

古文書と私……………相原隆三……………(1)
「村」と村方騒動―信州佐久郡下海瀬村……………大野瑞男……………(3)
史料所在調査報告Ⅱ真田家文書……………

出羽角間川本郷家文書……………(6)
史料のマイクロ写真化と撮影基準……………(8)
受贈図書……………(10)
新収史料紹介・講習会関係記事……………(14)
集報……………

ちに発見される例が多い。汚ないから燃してしまったと庭さきに古文書の灰を見たという極端な例を経験したこともあるが、倉がなくなり倉を出た古文書は現代住宅の中に保存される場所はなく、倉とともに消滅する時代へ入っているようにも考えられる。

私の地方は旧家が多く、農家もしくは農村が多いので、古文書が比較的豊富に保存されているが、都市化がすすみ倉がこわされ、屋敷が細分化され現代住宅に改建されていくにつれて古文書は紛失し、移住した場合は殆んど消滅してしまう。以上は現在地の都市化の問題であるが、農村から都市に近づくにつれて旧家が少なくなり、屋敷が改建されて古文書が少なくなっていく。そして都市部へ入ると僅かな古文書をもつ家さえ少くなり、古文書の分布から歴史のスピードがわかるような気もしてくる。

2

私は前からの習慣であきもせず古文書を原稿用紙に写している。そのためには古文書を借出さなくてはならないが、幸い古文書の多い地方で私の写すくらい古文書は知人にたのんでおけば何んとかなる環境にある。整理の都合から原稿用紙を複写し、同じ複写するなら二枚として所蔵者に御礼かたがた差上げることにしたが、これがすこぶる好評で古文書は一層入手しやすくなったようである。そのとき気付いたことであるが、私たちは古文書をかり読んでしまつと返却し、簡単な説明くらいしかしていない。そして所蔵者の所へは昔のままの古文書が残るだけであるが、複写を差上げれば下手な字でも古文書より読みやすく、古文書の内容を理解できるようになる。最初の複写をもつていくと逆に御礼をいわれ、次の古文書を喜んで貸してくれるし、私の調査に積極的に協力してくれるようになる。

また私のところへ持っていけば複写がもらえるからといって、地方史の仲間が古文書を借出し運んできてくれる。いつの間にか私は地方史仲間の古文書係のような存在になって、古文書を借出してくれた仲間は私が古文書の整理をしてくれるし、所蔵者へは複写がわたせて顔がたつというわけで、私自身の調査地域は居ながらにして拡大する傾向さえみせている。

更に最近 は 日本大学三島図書館の応援もえられるようになった。すなわち私の整理が終った古文書と原稿を図書館へ届けると、図書館では古文書をマイクロフィルムにとり、原稿を複写し、ついでに所蔵者謝礼用の複写もとってくれる。注意していても原稿には間違いがあり、原稿には写しきれない古文書のニュアンスや字配のようなものがあるが、マイクロフィルムにしておけばそれで修正できる。またたった一枚の古文書をマイクロフィルムという形で二枚にすることができ、保存度が高くなる。原稿の複写を整本しておいても例えば広く利用してもらうことができる。私自身にとっては複写の手間がはぶけるし、何よりも複写代を図書館で負担してくれることが有りが

たい。

私自身が所蔵者に散々迷惑をかけたおいて勝手な言い分であるが、遠くからわざわざ見に来た人に気の毒だからといって、約束の日には家におり、勝手に見てもらうわけにもいかないの一日中ぼんやり付合っていないてはならないことを考えて、できるかぎり所蔵者には迷惑をかけるないように務めるべきであることを痛感する。その点、図書館に複写があれば、遠くまで出かけて所蔵者に迷惑をかける心配もなく、整理してあるだけでも原稿の方が便利である。原稿に不審があればマイクロフィルムを調べればよい。ただしマイクロフィルムからたった一枚の古文書を捜しだすのは大変であるから、できうればマイクロフィルムからあらかじめ引伸して整本しておくて便利であるが、これは非常に費用がかかるので簡単には実施できないかもしれない。それでもなお不審の場合に所蔵者をたずねるとい形にしたものである。

3

これも私の奇妙な習慣であるが、私の所へきた古文書はできるかぎり写してしまふこととしている。まず

自録を作つてその中から重要なものだけを写せばよいようなものであるが、実物のない目録はものたりないし、目録をつくる時間で一点でも多く古文書を写しておきたいという個人の好みにもよるが、実際に古文書を写して感じてくことは、何が重要なのか、私には興味のない古文書であっても人によっては重要なのではなからうか、更に現代は重要でなくても我々がその重要さを知らないだけで、将来その価値がみとめられ我々の知らない内容が解釈できるようになるのではなからうか、などという奇妙な疑問が往來して、結局省略する古文書がなくなつてしまふ。

また古文書が紛失したり、他家の古文書に混入する心配もあつて、古文書は少しずつ借出す必要があり、一度返済してしまふと百年くらいは調べる人がないかもしれないし、まして一点づつ写す人など永久にないかもしれないし、あつては困るが、この古文書の調査は私が最後で紛失してしまふ心配もあり、できるかぎりは整理をし補修もし写しておこうということになる。

その結果、私の仕事はますますおそくなり、一軒の古文書に数年を

いやしてしまふこともあり、割付・田地証文など同じような内容の文書が多くなり、検地帳・名寄帳・横帳など枚数ばかりふえる文書も多くなつてくる。数字の多い古文書は表にしまへばよさそうなおものであるが、表化の過程に問題があり、表からの古文書復原には限界があるようである。但し同じような内容の古文書でも微妙な変化があり、僅かな個所に珍しい資料を発見することもあつて、同じ古文書はありえない、どんな古文書でも読んでみなくてはわからない、逆に欲しい資料でも捜せばあるというものではない、など当然なことかもしれないが、あらためて経験することが多い。

どの道、百年以上も昔のことだからのんびりあせらず、そして気長に百年後の仲間のために少しでも多くの原稿を残しておいてやろう、というのが最近の心境である。

(静岡県田方郡修善寺町在住)



「村」と村方騒動

——信州佐久郡下海瀬村——

大 野 瑞 男

である。

信濃国佐久郡下海瀬村は、現在では長野県南佐久郡佐久町に属し、南佐久郡のほぼ中央、千曲川右岸に位置しており、近世を通じてほとんどが代官の支配を受けた典型的な幕府領（天領）農村の一つということができよう。

古く下海瀬村は、隣接の海瀬新田村および上海瀬村とともに海瀬村と呼ばれ、一つの村を形成していた。慶長十四年（一六〇九）の年貢割付では、海瀬村の高二四〇貫文とあり元和八年（一六二二）の「佐久郡高書上帳」では村高四二一石二斗となっている。元和の石高は、小諸城主仙石氏の時代にも行われていた貫高に何らかの計数を掛けて処理した石高であって、検地の結果決定したものではない。海瀬村は元和八年の仙石忠政上田移封によって、將軍家光の弟徳川忠長領となったが、彼の狂疾を理由とした寛永九年（一六三三）の改易により幕府領に編入されたの

よって諸村の村高が確定し、幕藩体制支配が徹底したといわれる（古川貞雄「信州佐久郡初期幕領の地方支配方式と石代納仕法」——『信濃』二二七・九）。

さて、海瀬三か村のうち上海瀬村は、千曲川支流の温井川・余地川流域にあり、慶安四年（一六五一）より元禄十四年（一七〇一）までは甲府領（徳川綱重・綱豊）、宝永元年（一七〇四）からは三河奥殿藩（大給松平氏領分、文久三年同郡田口村に移り田口藩）の支配に入り廃藩に至るように、ほぼ私領の村である。これに対し、下海瀬・海瀬新田の二村は、千曲川東岸に南北に隣接しており、上海瀬村と同時期に甲府領であった以外は終始幕府領であった。少し細かに記せば、下海瀬村は延享元年（一七四四）より天明五年（一七八五）は松本藩（松平丹波守）預所であった。また海瀬新田村は享保十年（一七二五）に分郷、一は寛保より安永九年（一七八〇）まで松本藩預所、他は享保十年より安永六年まで旗本知行所で、それ以外の時期は幕府領であり、安永九年に合して元に復したのちはやはり幕府領であった。

ところで、下海瀬村は甲州往還沿

いの本郷（本村ともいう）と、南の崎田村に近い丘陵上に花岡組（花岡村・花岡耕地ともいう）、そして海瀬新田村を越した北に四ツ谷耕地地があつて、この三つの部落から形成されている。もっとも四ツ谷に集落が形成されたのは中後期と考えられ、また本郷・花岡との関係では本郷に所属している。

本稿では、幕末期に起こった一種の村方騒動を中心に、村と部落との関係について、村共同体の性格に係わる問題の糸口をさぐってみよう。最初に長文ではあるが、左の史料をみていただきたい。

乍恐口上書を以御伺奉申上候

当御代官所

信州佐久郡下海瀬村

本郷耕地役人惣代

名主

与左衛門

百姓代

辰 蔵

一私共村方之儀は用水其外海瀬新田と組合ニ有之、取斗向は私共耕地名主元方申触次第、枝郷花岡耕地ハ不及申ニ、海瀬新田役人一同立会取斗致シ、私共名主元方夫錢附込帳仕立置、右三ヶ与唱廉分致シ入用向記置、年内兩度七月十二月、両村役人并私共村方ハ五人組頭判頭迄立会取調割合、海瀬新田ハ

高受丈私共方へ出金仕来り申候、且御
繼立等組合ニ致し候節も、右之振合を
以取斗申候

一私共村方限り取斗向は、本郷耕地地主
元々申触次第郷花岡耕地役人一同立
合、不依何事取斗、且右入用向ハ夫錢
附込帳五式ケ与唱廉分致シ記置、年内
両度三ケ高請一同取調割合候節、花岡
耕地は其耕地百姓持田畑御公納米寄
立、暨名寄与唱廉帳面立取調置、右寄
米辻ニ而割受いたし、其耕地地主元ニ
而割合取立、私共耕地江出金仕来申候、
且御年貢諸役之儀茂、右之振合ニ而私
共耕地江附合御上納仕来り申候

一私共耕地限り取斗向ハ、耕地役人立合
取斗、諸入用之儀も夫錢附込帳江村斗
与唱ひ廉分いたし記置、年内両度耕地
役人五人組立会取調、式ケ高請夫錢一
同割合取立、夫々其向江諸私相立申候、
前書之通三ケ式ケ村斗与夫錢附込帳江
内実廉分致シ取斗来り候所、去年（安
政五）年春中村方儉約向議定書いたし
候折柄、重兵衛・半右衛門儉約向之儀
ニ付先御支配森孫三郎様御影御役所江
村役人相手取御訴申上、御吟味中当御
役所へ御引渡ニ相成、尚追々御吟味中
内済ニ相成、則済口証文奉差上、当八
月中御下知相濟村平和ニ相成候所、役
人茂人少ニ付新規与頭役式人相談之上
入札ニ而人撰為致候所、重兵衛・源助
高札ニ相成候間役人可致与差心得罷在
候所、少々差支出来、殊ニ御年貢諸夫

錢割合時節ニ至り候間、三ケ割可致旨

ニ而去年八月廿八日使差出候所、重兵衛・
半右衛門兩人ニ而与左衛門方始メ武太
夫并百姓代方へ罷越申聞候は、去年年
中取究候議定書ニ相振レ候間、夫錢割
へ立合不申候由相届候間、何れ之廉を
相破り候哉之旨与左衛門方相尋候所、
夫錢諸帳面百姓代之もの其時々写取、
皆済已前二小前江披見為致可申文言ニ
候所、未タ披見之沙汰も無之割合之由
申觸候間立合不申与之儀、尚又与左衛
門より申聞候は、右は本郷耕地ニ而相
極候議定書ニ而、式ケ三ケハ除居候儀
ニ付、本郷丈之夫錢帳ハ為写取可申儀
ニ候得共、惣議定なつてハ式ケ三ケ之
夫錢帳迄為写取候儀は難相成儀、殊ニ
五人組判頭ニ候得は式ケ三ケ江も立合
割合候儀、分而も与頭役ニも内実ハ取
定り居候間、役人不仕候とも役人同様
之儀ニ候間、混雜不申聞立合割合異候
様申聞候所、我意申張御役所様ニ而挨
拶可致杯申答退失仕候間、使差出候三
ケ割相見合、一同相談之上当人組合親
類江私共及差因異見為致候所、半右
衛門儀は意得致、何ニ而茂申分無之由
昨晦日役人詰合居候席江申出候得共、
重兵衛義ハ何分承知不仕、左候所当月
七日八日兩日は、定例御年貢夫錢取立
日ニ而当惑難捨置、依而御下知ニ随ひ
取斗度、乍恐此段口上書を以御同奉申
上候、以上

安政六末年 名主

十二月一日 与左衛門

百姓代

辰 蔵

木村重平様

御影御役所

（土屋家文書一三九七）

右の史料によれば、下海瀬村は千
曲川の上流より引水する用水を、海
瀬新田村と共同で利用し、またその
保全管理に当たつており（組合用水）
入費は枝郷花岡・海瀬新田村・本郷
の村役人が立ち会い本郷名主元に仕
立ておく夫錢附込帳に記帳し、年二
回、七月と十二月に両村役人立ち会
いの上で取調べ各戸に割合うのが決
まりであり、本郷・花岡・海瀬新田
の三者を単位に課せられる夫錢であ
るので、「三ケ」と唱えた。

これに対し、下海瀬村限りの村入
用は、本郷・花岡両役人が立ち会い、
夫錢附込帳へ「式ケ」として記し、
「三ケ」割合の節、花岡では個々の
年貢米高掛りに割合い取り立てて本
郷へ出金する定めであつた。これは
年貢諸役の上納と同様であつた。

そして、本郷限りの諸入用は夫錢
附込帳に「村斗」として記し、年二
回本郷役人および五人組頭が立会い
「式ケ」夫錢と一緒に割合い徴収す

ることになっている。

実際に、土屋家文書の村入用夫錢
帳をみると、三ケ・式ケ・村斗の見
出紙が付せられ、別に三ケ割夫錢目
録帳三九冊、式ケ割夫錢目録帳二九
冊、村斗夫錢目録帳三七冊が残され
ているのを認めることができる。

そこで一つの問題を抽出してみよ
う。まず、下海瀬村内部では本郷に
対して枝郷花岡がそれぞれ一つの村
として機能しているようにみえる。
花岡は位置も水系も本郷と異なり、
名主も必ず一人出している。年貢の
割付は勿論下海瀬村全体に一紙であ
るが、本郷役人は花岡分割付を別に
発行し、皆済目録も同じく別に発行
している。その他のことからみても
本郷は花岡内部の「自治」を認めて
いるようにみえ、花岡村と呼ばれる
こともある。

一方、海瀬新田村は行政村として
成立していることはいうまでもない
が、諸入用夫錢については下海瀬村
と共同関係にある。前記史料の夫錢
は組合用水についてであるが、この
ほか助郷伝馬役、入会林野に関する
ものが共同関係である、が鎮守諏訪
社も下海瀬村のそれであり、両村共
同で祭祀を執行しているし、「野堅
帳」とよぶ毎年の村定めも、両村会

員が連判していることは興味を惹く。つまり、本郷・花岡と海瀬新田の三共同体があり、さらにそれが一つにまとまっているが、行政村落としては二つになっているといえようか。いまその理由は不明であるが、前述の村切のあり方に解く鍵があると考えているのである。

二

ともかく、下海瀬村では前述のような夫銭割合法を行って来たのであったが、安政三年（一八五六）から文久二年（一八六二）にかけて一つの事件が起こった。土屋家文書目録では「夫銭出入」の項目中に一括しておいた重兵衛・半右衛門一件である。

天保五年（一八三四）夫銭不納や連印拒否で代官所に訴えられた元名主重兵衛は、安政三年春の組頭入札に対しても出訴し、翌年暮も村役人交代に難渋をつけ、五年二月名主武太夫・組頭与左衛門他四人を相手取って私欲押領不法出入として、百姓半右衛門とともに代官所に訴えたのである。これに対して武太夫らから返答書が出され、六年六月内済になったところ、入札にて新規組頭に選ばれた重兵衛が前年村議定に触れる故、夫銭割合に立会わないと主張し

たことから、再び対立が起き、村側が代官所に伺書を差出したのである。前掲の史料はこの時の伺書である。

この伺書では、五年春に村中儉約議定がなされ、その議定書に触れる旨重兵衛らが申し立てているが、その議定書は土屋家文書中にない。しかし、同年十二月に同様の議定書があり、村役人はもとより、五人組頭重兵衛・百姓半右衛門も連印しているのでそれを以下に示そう。

議定書之事

一 今般村方一統相談之上取定候処左之通
一 小前之もの都而掛合等出来候とも、其もの親類組合五村役人及差図異見為致、可成文御願ニ不相成候取斗可申事
一 役元諸人用之帳面、百姓代方ニ而小前
五 為見届候上、役元帳箱入ニいたし相廻シ、不用之節ニ至り相談之上破帳可致事

右之通り相定、別紙議定書一同調印之上、是又相守、村為専一ニ可致答、為後日一札取定申所如件

下海瀬村

（惣連印略）

安政五年十二月

（土屋家文書三二四）

重兵衛らが村役人側から逆に訴えられたのは、年貢・夫銭・諸雑用不納の廉であるが、重兵衛らの主張は

①夫銭額の高騰に反対、②夫銭附込帳の公開と監査、③五人組構成の改善と五人組頭選出の公正、④村議定遵守と儉約励行、村内改革であり、いわば村内「民主化」要求でもある。

夫銭は従来村で年間五〇兩ほどであったが近年二〇〇一三〇兩にも高騰し、村民の負担増になっている。重兵衛はその原因に村役人寄合経費、とくに酒肴代をあげている。村側の陳述では崎田村との用水出入に伴う出費、郷借の返済の増加を挙げているのであるが、また、五人組構成について説明すれば、下海瀬村では親親縁者による同族団結合であって、七八軒隔てても同じ「マケ」（同族）であれば一つの五人組となり、五人組頭選出、それに五人組頭から選出される村役人選挙には情実や金銭がからまり不正が多い。そこで重兵衛は弘化期の代官川上金吾助の達しのように、家並最寄による地縁的な五人組構成に編成し直せと要求しているのである。

結局、重兵衛の要求は一部認められ、村斗夫銭帳を写し取らせるのであるが、翌安政七年になると重兵衛は宗門人別帳下書の提出を拒否し、先の半右衛門とも対立してこれを打擲するに及んで刑事事件となり、重

兵衛ら四人は入牢・村預けになる。しかし万延元年に至って漸く内済となり、翌二年重兵衛は滞納夫銭を完済して隠居し、やっと一件は終るのである。

右の一件を他の側面からの分析なしに村方騒動と規定するのは性急であるかもしれない。しかし化政期以降幕末まで、下海瀬村にとどまらず近村においてこのような一件は頻発する。その原因は年貢・夫銭の賦課をめぐるであったり、あるいは村役人選出、質地そのほかの地所出入であったり様々であるが、幕藩制村落内の矛盾が噴出してくるがためであらう。

土屋家文書目録の公刊を機会に、近世村落とは何か、そしていかなる矛盾にとって変質・解体していくのかという問題が解明されることを期待したい。

〔付記〕土屋家文書目録は、「史料館所蔵史料目録」第二十四集として昨年度発行の予定でしたが、諸般の事情により、本年度発行となります。関係者・利用者にお詫び申し上げます。

在所 史料 調査 報告

長野市
真田家文書

表記文書は、昭和四十一年に旧松代藩主真田家の当主から旧松代町に寄贈され、同四四年三月をもって、松代町の長野市への編入に際して、旧真田邸および象山記念館の長野市への所管替えと同時に長野市の所蔵（現在、同市商工部観光課所管）に帰したもので、目下、旧真田邸（文久三年造営・県指定文化財）に保管されているものである。

同邸内には、諸道具類とともに文書類を収納する一番から七番までの七棟の倉庫があつて、これらの収蔵品について、すでに「真田家伝承宝物台帳」（諸道具類。四一年以降作成。全三冊）、「長野県指定文化財目録」（朱印状・領知目録等。四七年指定。三八一点。一冊）および「宝物基礎台帳」（道具類中心。四四〇四七年作成。全一五冊）の三種の目録が作成されているが、文書・記録類については、独自の総目録作成に着手されておらず、その全貌は不明のままであつた。

既報のように、当館では昭和二十四年度収集の「信濃国松代真田家文書」

（総点数約三万）の整理―目録刊行化の準備作業を進めているが、去る三月中、そのための関連史料調査を前記真田邸において行なつたさいに、右の事実を知るとともに、真田邸副館長寺尾大園氏のご案内で倉庫内のぼう大な貴重史料に初めて接した。そこで、この実態を可能なかぎり明らかにして、一つには長野市の史料整理―保存公開計画の一助になり、他面で研究者への紹介になればと考へ、同館に申し出たところ、早速、全面的なご理解が得られ、本格的な調査を計画したものである。

調査は、長野県史編纂委員塚田正朋氏を委員に委嘱し、地元松代在住の関係者はじめ県内の研究者各位を協力者として、去る八月五日から十一日まで、延べ約五〇人の方々と当館からも三名の職員が参加して行なわれた。今回は、諸般の事情を勘案して全七棟の倉庫のうち、主として文書・記録類が格納されている三番と四番庫を整理対象としたが、史料が、当初予想した以上にぼう大かつ錯綜が甚しかったために、結果的に

は第四番庫の集中的調査に主力を注ぎ、三番庫その他の庫の調査は、次回を期さざるを得なかつた。

整理に際しては、原型尊重の建て前に立つて既格納の箱単位に進め、箱には宝物館のラベルを、史料には調査者用意のラベルを貼付して番号を与へ、この順序にはば史料一点一番号として目録を作成した（なお典籍類は除いた）。この総点数は三、一三〇点に及ぶ。

比較的に纏まつた史料は、以下のとおりである。

- (1) 日記・御用状留類Ⅱ文久以降南天・奥日記（約五〇冊）、享保Ⅰ万延定小屋日記（約七〇冊）、享保Ⅱ慶応監察日記（一五冊揃）、文政八〇明治三在府在邑中日記（約四〇冊）、文化年間藩日記書抜（五冊）、慶応四年以降留守居方・松代公用方・藩県庁日記類（約二〇冊）、文政九〇慶応元御留守居方御用状留（約一二冊）。
- (2) 幕末・明治初期藩財政・禄制関係Ⅱ藩債証文類（約六〇通）、藩制・財政改革書類（約一〇〇点）
- 明治二年以降高・租税・戸口牛馬・兵員・銃器等取調書類および郷村高帳（約四〇冊）、諸士明細書・履歴書・給禄帳（約四〇冊）。

(3) 明治元年〜四年布告・回章・太政官布達類（約四五〇点）松代藩触頭当時のもの多し。

(4) 出兵関係Ⅱ長防一条（約一〇冊）、甲州出兵一件（約一五点）

戊辰東山・北陸・東北出兵関係（約一五〇点）

(5) 明治期以降家政関係Ⅱ東京・松代歳入勘定帳簿類（貸付金・貸付地経営、悟蔭塾その他貸費生への学資金貸費等も含む）約一、五〇〇冊

(6) その他、藩政時代の国役普請、助郷、借財、天保期産物一件、養蚕・酒造取締関係・家譜類等多様なもの

以上のような豊富かつ多彩な内容の史料の確認を行なうことができたが、今回の当館委嘱の調査終了後、長野県史編纂室が中心となつて、今後引き続き、四番庫その他各庫の調査が、本年一〇月以降、随時実施されると聞いている。この成果にも、大きな期待を寄せたい。

最後に、今回の調査の企画と実施に当つては、終始、保管者である長野市立真田宝物館・象山記念館・真田邸の館長矢沢頼忠氏以下職員各位の全面的な協力と、長野県史編纂委員長一志茂樹氏はじめ主任編纂委

員黒坂周平氏はか編纂室のみなさん、信濃史料刊行会の米山一政氏などの暖かいご高配とご指導を得ることができた。調査の実地統轄に当ら

秋田県大曲市角間川

本郷家

文書

秋田県大曲市角間川（旧平鹿郡角間川村）は、雄物川の水恵をうけて当時（明治前期）県内随一の商港であった土崎港に次ぐ舟運の要衝に位置し、県南における最大の良港であった。そして、平鹿・仙北の沃野に産出する農産物の集散地として主産の米穀類を積み出し、他方日用雑貨・魚介類、移入港として遠く北海道・大阪・山形・岩手等に取引圏を広め、同地方商業の中心を占めていた。また富商軒をつらね大地主も多く、県南の富を一手に収める観がある。〔秋田県史〕第五巻・明治編による。）

横手盆地のほぼ中央に位置する角間川に、明治三年の「貴族院議員多額納税者互選名簿」において第三位を占める本郷吉右衛門家をはじめ最上家・北島家などの大地主の経営が展開していた。昭和二五年、本郷太郎氏は八代目の当主を継いだので

れた塚田正朋氏・調査員各位ともども、ここに改めて深甚の謝意を表する次第である。

あるが、そのさい多少の古文書が処分されたようで、翌二六年に仙台の古書店を通じて当館が購入したものが、当館の本郷家文書である。受入れのさいの整理の目録では八〇〇点余であるが、未整理史料を含んでいるのもっと多い点数になろう。寛政以降明治期までの、持高書抜、村小役銀、入作、小作米勘定差引、商取引などの帳簿類、物成切手、証文仕切など書付類が多い。

本年、秋田高等工業高等学校教授高橋秀夫氏から、現本郷家に大量の史料が保存されており、秋田近代史研究会の方々、東大経済学部石井寛治氏とそのゼミの学生、専修大学の加藤幸三郎氏らが時折調査されているので、このさい徹底的に調査し、目録を作成したい旨の希望が出され当館としても本郷家文書の関連調査および所在調査事業の一環として、これに協力することに決し、八月十

六日から十八日まで二泊三日の日程で調査を実施したのである。

実施に当たっては、高橋氏・秋田県雄和町大正寺小学校校長田口勝一郎氏など九名に委嘱し、当館からは第三史料室大野瑞男が参加した。なお特筆すべきは、東京大学・神奈川大学・東京女子大学などの近世近代史専攻の学生、弘前大学・国会図書館・東大史料編さん所その他の教官・職員が一〇名ほど自費参加した下さったこと、秋田大学教授半田市太郎氏が協力のため視察に来られたことで、猛暑の中大量の文書整理に汗を流して下さったのは感謝のことばもない。終始ご好意を賜った当主本郷太郎氏にも、本紙を借りて厚く謝意を述べたい。

さて本文書は老大であるので推測の域を出ないが、約二千冊・一万数千通にもおよび、大部分は明治期以降の文書であるが、近世後期から戦後農地改革に至る土地・商業金融の基礎史料である。まず全体を、①家政、②土地・小作、③商業・金融、④証文、⑤書簡、⑥村、⑦その他、に大別分類し、ナンバーを史料に付して目録をとった。勿論大量の故に最も多い書簡類は手がつかないものも多かったが、短時日のうちに二千

点以上の目録を作成し、後日の利用を考慮して、分類・ナンバーどおり箱に収納、注記して元の蔵に収納したのである。

特色としては、商業・金融に分類し、また書簡にも多く含まれるところの、本郷家の米穀商人や銀行金融の機能を示す史料であろう。明治初年以来、平鹿・仙北地方は小作地率が高く、大地主を生み出しているのであるが、秋田・仙北米は乾燥不良の腐米が多く、地主・米商は米穀改良に苦心し、明治一三年農村金融機関として秋田改良社が角間川に設立、本郷吉右衛門を頭取として、土地開拓・腐米改良・北海道移出などに効果をあげ、二三年平鹿銀行として普通銀行に転換した。また合名会社五業銀行にも入社し、株式会社第四十八銀行の役員になるなど金融面で活躍し、保善会社本郷合名を組織し、土崎を通じて全国市場と結び、商業面で発展するのである。

本調査はまだ第一段階であり、これを機に調査が継続され、一巨大地主を通じた近代経済構造の分析の進展が望まれる。

史料のマイクロ写真化と撮影基準

史料をマイクロ写真化する事例は増加の傾向にあるが、撮影から管理にいたるまでの処理方法が未確立なために、各機関の担当者は苦心して独自の解決策を案出しているのが現状である。本誌では、以前に、整理と管理について第十一号で、管理と利用について第十八号で、それぞれ簡単な報告を行なったが、今回は撮影に関する具体的な留意事項について、当館の撮影要項を中心に紹介を試みることにする。少しでもお役に立つことがあれば幸せである。

まず、下記の要項の目的は、館外の所蔵者の所蔵史料を撮影する——従ってそれは多くの場合一度しか与えられぬ機会に撮影するためのものである。しかも、マイクロ写真が特性としても撮影上の制約から、撮影方法の規格の統一が要求される。そこで、いつでも同じ形態の映像が得られるように撮影の際の基準を決めた要項が必要になるわけである。但し、下記の要項は、その前文にも記してあるように、史料という対象物の特殊性に対する特別な注意事項をまとめたものであり、撮影の技術

的な事柄は、プロの技術者の常識なり力量なりに委せてある。要項に示したことも原則あるいは基本であって時に変更する場合もあり得る。これは矛盾するように見えるが、実際には多少の余地を残しておく方が便利だという実践経験の結論である。

もとより、このような要項が始めるから存在したわけではないが、また突如として生れたものでもない。常に失敗の経験が改善を促したといつてよい。例えば、貼紙を下から——原形から写していくと、一度めくった貼紙がはね上って写しにくいとか、文字の解読のみを考えて余白を省略したために原形が不明になるとか、何れも貴重な体験であった。始めの頃は適当なガイドブックもなく、すべてが手さぐりの状態であった。それが、何度かの修正を経て、このような条項にまとまったのは、館員はもとより、技術者としてのプロのオペレーターの方々の協力によるものである。一度決めた様式は安易に変更すべきでないことは当然であるが、少しでも完全な形態を目指して、修正するための努力は今後とも

続けるつもりである。

(なお、事務手続上の必要から、下記要項のうちで国文学側の条件と一致するもの——例えばフィルム規格などは、国文学研究資料館としての統一の仕様にまとめることが予想されているが、下記の骨子には変更が及ぶものではないので、念のため付言しておく。)

国立史料館における史料のマイクロフィルム撮影要項

本要項は、史料館において、収集・保存を目的として史料を撮影するに当たっての主要な留意事項をまとめたものである。これらは、史料の特殊性にもとづくものであって、マイクロフィルム撮影の一般的事項は、当然のこととして省略してある。なお、下記の要項は、いずれも原則的な処置であるから、個々の処理に関しては、撮影者と担当館員が協議し、または担当館員の指示に従うものとする。

一、フィルム

三五ミリ、無孔、一〇〇フィート、ロールフィルムで、ミニコピー以上の品質のものを使用する。ネガフィルムは永久保存用であるから、その目的に適応するものとし、とくに現像および現像後の処理に注意すること。

二、撮影の基準とターゲット(図一、

図一参照)

二一 リーダーは五〇センチメートル、トレーラーは四〇センチメートル以上とする。

二二 史料は主として右書きであるから、フィルム上の画面の配列は、右から左へ流れるようにする。

二三 各リールの始めには、ターゲット①、②、③を入れる。一文書の最終コマの次にターゲット⑥を入れる。

二四 前項のターゲット③の次に一コマ空振りしてから本文にはいる。(前リールからの続きの場合は、本文の前にターゲット⑤を入れる。)

二五 各史料の第一コマに史料番号を同時に撮る。

二六 史料番号のかわるごとに二コマ空振りする。但し、一点が一コマで終了する史料が連続するような場合には、空振りを適宜に省略してよい。

二七 一つの史料の途中でリールが変わるときは、前のリールの末尾にターゲット④を、次のリールの本文冒頭にターゲット⑤を入れる。

二八 各コマのフレームは、フルサイズを原則とするが、映像のある実効部分の周辺に多少の余裕

をおくようにする。

二一九 一、にも記したように、このフィルムは永久保存を目的とするから、フィルム濃度についても、そのための配慮が必要である。(濃度〇・九〜一・二程度を維持することが望ましい)

三、撮影方法

三一一 縮率とプレースメント 文字の大小にもよるが、原則として、冊子型の帳簿類(以下「冊子類」という)は、豎本では美濃版(タテ三二×ヨコ一九cm位)までは見開きで(三一×三六cm位になる)撮り、横長本は小型本を除き、見開きでなく、片面ずつを横位置で撮る。一紙物の書付類(以下「書付類」という)は、冊子類の大きさに準じて撮る。なお、一つの史料は同一縮率とし、途中で縮率を変更しない。

三一二 余白 冊子類および書付類ともに、文字の書いてある紙面は余白の部分を切捨てずに必ず全面を撮る。

三一三 冊子類の表紙と白紙ページ 冊子類の表紙および裏表紙は、文字の有無に拘らず必ず全部を撮る。一冊の途中にある白紙ページは、第一ページ分を撮り、以下は省略する。横長本の、表

紙裏および各丁のウラは、文字がなければ省略してよい。

三一四 裏書と包紙 書付類の裏面に文字がある場合はこれを撮る。特に端裏書に注意する。これらの裏面の撮影では余白(三一二)は省略してよい。

包紙や封紙は、それに文字のあるときは必ず撮る。

三一五 貼紙と貼札 冊子類・書付類ともに、本文の文字の上に修正のために貼った貼紙は、始めに現状のまま撮り、次に貼紙をめくって下の文字を撮る。貼紙が二枚以上重なっているときは、順次に下の文字に及ぶ。(但し貼紙の全面が糊付けされているときは、当然がさずに現状のみでよい)

料紙の上辺または下辺に貼付けてある貼札は、本文を撮った次のコマに、史料を上下に移動して貼札を撮る。この場合も原則として縮率は変更しない。

三一六 剝離紙片 前項の貼紙や貼札で、糊がはがれて貼付箇所が不明のものは、本文の次のコマに独立して撮る。このとき「剝離貼紙」の注カードを撮し込む。

三一七 付属の書類 冊子類の丁間に挿入である書付類は、本文の次のコマに独立して撮る。このと

き、「挿入一紙文書」の注カードを撮し込む。

三一八 分割撮影 長尺の書付類を分割撮影するときは、前後の続きを明瞭にするため、必ず一行ずつ重複して撮る。

5	4	3	2	1
10	9	8	7	6

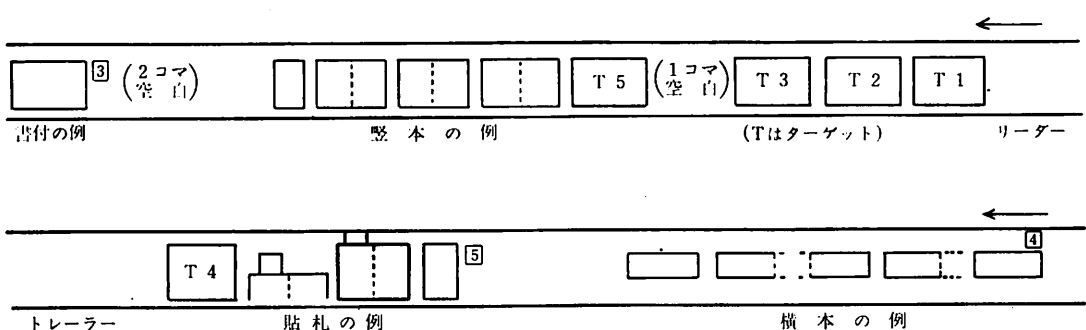
図面等の分割撮影の順序は、原則として右図の通りとする。

四、リールNoおよびコマ数の記録 撮影者は、担当館員から渡された目録用紙の該当欄にリールNoおよび各史料の(史料Noごとに)撮影のコマ数を記入し、担当館員に返却する。

図-2 ターゲット

③ 年 月 日 (撮影者)	② (文 書 名) (所蔵者名)	① 国立史料館 収集史料 不許複製
⑥ 全部終り (文 書 名)	⑤ 前の フィルム の 続 き	④ 以下 次のフィルム に 続 く

図-1



受贈図書

昭和四十九年度 (二)

府中市史 下巻

シリーズ 一・二
史料所在目録 一〜四〔日光市史編さん室〕

(群馬県) 境町歴史資料 九三〜九五
(埼玉県) 庄和町史編纂資料 (一)〜(三)
相州陶綾郡旧村方資料 第三輯〔大磯町教育委員会〕

養蚕神の信仰について〔都留市教育委員会〕

中溝遺跡〔同右〕

(静岡県) 引佐町史料 第二・三集

埋蔵文化財発掘調査概報〔京都府教育庁文化財保護課〕

あしあと〔鳥取県立米子図書館〕

創立五十周年記念論文集〔松山商科大学〕

徳島県博物館要覧 昭和四十九年度
金沢文庫資料全書 仏典第一巻禅籍篇
図書館利用案内 昭和四十九年度〔国学院大学図書館〕

枚方市史 第九巻
日光市史料 第一・二集
上野市議会小史

鏡ヶ丘の九十年〔弘高九十年記念事業協賛会〕

沖繩県史 第二三巻民俗二
会員名簿〔対馬郷土研究会〕

青森県内県市郡町村史〔誌〕目録〔青森県立図書館〕

東北大学附属図書館所蔵 特殊文庫目録

高知県市町村史〔誌〕一覧〔高知県立図書館〕

蔵書目録 第三巻〔市立室蘭図書館〕
増加図書目録 昭和四十七年度〔小樽商科大学附属図書館〕

学術文献収報 一五二〜一六〇〔北海道教育大学附属図書館〕

山形県立博物館研究年報 第二号
譜牒余録 中〔内閣文庫〕

浦和市近世文書目録 三〔浦和市教育委員会〕

歴史資料館収蔵資料目録 第三集〔福島県文化センター〕

近世史料所在調査報告 九〔埼玉県立浦和県立図書館〕

埼玉県行政文書件名目録 県治編Ⅲ〔同右〕

蔵書目録 第一七集〔福島県立図書館〕

山口県文書館史料目録 第四分冊
図書目録 (4)〔愛知県立大学附属図書館〕

雑誌目録 一九七三〔愛知県立芸術大学附属図書館〕

蔵書目録 第六輯〔同右〕

近世庶民史料目録 第三巻〔岡山大学附属図書館〕

主観別参考文献目録 第四〔神奈川県立金沢文庫〕

尼崎市史編集資料目録集 二〇〜二二
収蔵資料月報 No. 一三〜一六〔京都府立総合資料館〕

竜王町古文書目録 追加分〔竜王町教育委員会〕

増加図書目録 昭和四十七年度〔岩手県立図書館〕

鳥取県立博物館所蔵目録 九・一〇
郷土資料目録 昭和四十七年版〔那覇市史編集室〕

府中市史 上巻
大館市史編さん調査資料 第十四集

官公庁出版物目録 昭和四十七年版〔国立国会図書館収書部〕

足軽廻と陣笠展示品目録〔埼玉県立博物館〕

明治天皇紀 第九〔宮内庁〕

図書寮叢刊 九条家文書四 詞林金玉集
上巻〔宮内庁書陵部〕

千葉県成田市史資料目録 古文書Ⅷ
津山市史 第五巻近世Ⅲ―幕末維新

東京市史稿 産業篇第十八 市街篇第六十五

博物館目録〔若祥寺博物館〕

むかしばなし〔石川ツナヨ〕
日農工三十五年のあゆみ
日清製油株式会社六十年史

ニチバン五十年史
三十年のあゆみ 昭和一四〜四四年〔日鉄鉱業〕

二十年の歩み〔日本兵器工業会〕
高砂香料五十年史

八十三年のあゆみ 第一編〔間組〕編集委員会

沢内の民話〔高橋善二〕

社格時代の沢内村の神社〔秋田県〕沢内村教育委員会

百年のあゆみ―年表で見る沢内の歴史―

〔同右〕

わたしたちの沢内〔同右〕

沢内年代記〔太田祖電〕

福島県関係地理学文献目録〔里見庫男〕

大田区史 資料編考古Ⅰ

成田市文化財分布調査報告 埋蔵文化財

編

七尾市史

神奈川大学図書館雑誌目録 昭和四十八

年十二月末現在

品川区史 通史編下巻

高知県史 近代史料編

松山市文化財調査報告 Ⅲ・Ⅳ〔松山市

教育委員会〕

〔新潟県〕 下田村文化財報告 第一輯

秋田城跡発掘調査概報 昭和四十八年度

〔秋田市教育委員会〕

清水建設百七十年

磐城国湯本温泉誌〔常盤青年会議所〕

いわきの歴史と風土〔菊地康雄〕

川場村関家文書目録〔群馬の森建設室〕

図書館のしおり〔市立釧路図書館〕

図書館利用案内―学生版―〔東北大学附

属図書館本館〕

博物館のしおり〔仙台市博物館〕

〔福島県〕 国見町史資料所在目録 第一

集

北海道開拓記念館調査報告 第三・五号

福島市史資料叢書 第二八輯

北海道刊行政資料目録 第八号〔北海

道総務部行政資料課〕

神奈川県史資料所在目録 第三九～四一

集

〔埼玉県〕 大滝村誌 資料編二・三

大日本史料 第一編之十九 第八編之二

十九〔東大史料編纂所〕

天保十三年 伊勢参宮道中日記〔高郷村〕

博物館資料集 三〔久能山東照宮博物館〕

白石市史 5 史料篇〔下〕

長野県史 近世史料編第五卷〔三〕

大日本古文書 家わけ第十九之八〔東京

大学史料編纂所〕

太陽 七十四年十一月号〔平凡社〕

武生市史 資料篇 諸家文書〔一〕・民俗

篇

端浪市史 史料編・歴史編

〔高知県〕 橋原町史

〔岡山県〕 賀陽町史

大日本古文書 幕末外国関係文書之三

〔東京大学史料編纂所〕

道―加藤車体工業七十年の歩み

興亜石油四十年史

高知相互銀行四十年史

泉州銀行二十年史

東肥十五年史

日本生命七十年史

松坂屋六十年史

安田信託銀行四十年史

大日本近世史料 市中取締類集 幕府書

物方日記 細川家史料四 編修地誌備

用典籍解題三〔東京大学史料編纂所〕

佐倉市史 巻二

〔愛知県〕 新城町誌

〔愛知県〕 東郷村沿革誌

西尾市史史料 Ⅲ

草津百年の歩み

〔岡山県〕 日生町誌

防衛施設庁史 第一巻

築地警察署史

大日本古記録 建内記六 猪隈閑白記

〔東京大学史料編纂所〕

保古飛呂比 五〔同右〕

日本関係海外史料 オランダ商館長日記

原文編之一・二〔同右〕

本庄市史料 第九卷〔上〕本庄宿田村本

陳文書

愛知県教育史 第三卷〔愛知県教育委員

会〕

長野県教育史 第九巻史料編三〔長野県

教育史刊行会〕

〔青森県〕 平内明治史資料集 第一集

〔平内町郷土研究会〕

市立函館図書館郷土資料複製叢書 二四

二六

文政十年「矢島分限帳」について〔一〕

今村義孝・高橋秀夫・中谷雅昭

福島地方史研究叢書 第二集〔福島県立

図書館〕

佐倉人物伝〔佐倉市誌編さん委員会〕

佐倉城の歴史〔篠丸頼彦〕

新城市誌資料 X・XI

峰山入会古文書〔川合森之助〕

市年表〔広報もんしろ〕

明治百年年表 その一～三〔滋賀県多賀

町〕

倉吉市史

夜須の植物〔小松定義〕

夜須町文化財めぐり〔夜須町教育委員会〕

大分県塩業史〔日本専売公社塩業大系編

さん室〕

安城学園六十年誌

日本の国会特別展展示目録〔憲政記念館〕

幕末明治耶蘇教史研究〔小沢三郎〕

資料富山県労働運動史 第三巻〔富山県

労政課〕

概報下堤遺跡 第六次〔秋田市教育委員

会他〕

世界史のなかの明治維新〔京大人文科学

研究所〕

特別展解説目録 第七号〔伊丹市立博物

館〕

武蔵野の板碑展〔武蔵野郷土館〕

寄贈品展示図録 台湾の民具〔埼玉県立

博物館〕

特別展東北の美術展示品目録〔同右〕

山形市史資料 第三六～三八号

知立市誌資料 三

小牧の文化財 第二～四集〔小牧市教育

委員会〕

津島の文化財 第一集〔津島市教育委員

会〕

〔愛知県〕 知立町誌 文化財編

〔愛知県〕 東浦町誌

豊橋鉄道五十年史

〔高知県〕 桑村誌

〔愛媛県〕 伊方町誌

日本の科学と技術 No. 一七〇〔日本科学

技術振興財団

中山道永井家所蔵文書目録〔浜川市立浅
本宿野記念図書館〕

野記念図書館

中山道
磯永嶺曾根家文書目録〔同右〕

中山道
坂本宿本陣文書目録・同補遺〔同右〕

蝦夷文獻集目録〔太田岩太郎〕

千島関係文獻概略〔北海道立図書館〕

清水谷伯爵家所蔵史料目録〔同右〕

河野前主任引継書〔北海道史編纂掛〕

北海道関係旧記一覽 昭和四十六年三月
現在〔北海道立図書館〕

本庁文庫圖書目録 歴史旧記〔北海道庁〕

北海道庁文庫圖書目録 報告之部〔同右〕

圖書原簿 雜之部〔同右〕

樺太関係圖書目録〔北海道立図書館〕

Proceedings of SECOND ASPAC
MUSEUM CONFERENCE [CULT-
URAL AND SOCIAL CENTER
FOR THE ASIAN AND PACIFIC
REGION]

日本外交文書 大正十年第一冊下〔外務
省〕

東京都公立図書館雑誌総合目録稿 昭和
四十七年十一月一日〔東京都公共図書
館参考事務連絡会〕

八杉文庫目録〔東京外国語大学附属図書
館〕

郷土・都区行政資料目録〔東京都政飾図
書館〕

天竜市西藤平大富部陸夫氏所蔵近世古文
書目録〔国学院大学地方史研究会〕

宮城県市町村史誌目録〔宮城県立図書館〕

香川県立図書館所蔵豪華本目録 昭和四
十八年三月一日現在

勝田〔敬一郎〕家史料目録〔茨城大学附
属図書館〕

勝田〔忠雄〕家史料目録〔同右〕

吉田義王院文書目録〔水戸市史編纂委員
会〕

小島久雄氏所蔵文書目録上・下〔同志社
大学人文科学研究所〕

丹波国桑田郡山国郷拾二ヶ村並広河原村
史料目録(1)〔同右〕

江口九一郎氏所蔵文書目録〔同右〕

河原林孟夫氏所蔵文書目録〔同右〕

西八郎氏所蔵文書目録〔同右〕

西陣木村卯兵衛家文書目録・北之御門町
文書目録〔同右〕

松尾神社社蔵文書目録

革嶋家文書目録稿〔棚倉信文・辻ミチ子〕

革嶋家文書目録〔京都府立総合資料館〕

肥前・島原松平文庫目録〔島原公民館図
書部〕

都留市の古文書〔近世編〕 第一卷

洲本市史

〔愛知県〕赤羽根町史

神宮御前山記録〔神宮司庁〕

府中市自然調査報告―第四次調査―〔府
中市立郷土博物館〕

山形県史 資料篇一三・一四

神奈川県立文化資料館展示目録 一・二

・四

茅ヶ崎市史資料所在目録〔茅ヶ崎市教育

委員会

〔大分県〕日出町立万里図書館所蔵郷土
資料目録 第一集

蔵書目録 自昭和二十三年四月至四十八
年三月〔静岡県議会図書館〕

東京都文化財総合目録 昭和四十九年版
名古屋市鶴舞中央図書館所蔵名古屋市史
資料目録

坂出市立図書館蔵書目録

大垣市立図書館漢籍目録

〔同右〕郷土資料目録 第一・二集

福井県立図書館増加図書目録 第一・四
分冊

東北大学所蔵和漢書古典分類目録 漢籍

宮城県図書館蔵書目録 郷土資料

図書目録 昭和四十二年三月三十一日現
在 追録Ⅰ・Ⅱ〔宮城県議会図書館〔室〕

気楽院文庫圖書目録〔小国東岳〕

図録日本の貨幣 五〔日本銀行調査局〕

仙台市民図書館郷土資料目録 四・七

仙台市博物館収蔵資料目録 Ⅳ

郷土資料目録 第十・十一集

宝塚市史編集資料目録 七・八

青梅市史史料集 第十九号

品川区史 通史編下巻

勝山市史 第一巻風土と歴史

蔵書目録 総記・哲学篇 歴史篇〔福島
県立図書館〕

増加図書目録 昭和四十六年度〔同右〕

石巻市図書館郷土資料目録

近世封建貢租の推移〔立正大学古文書研
究会〕

勝田家史料集 (1)〔茨城大学附属図書館〕

奥村家史料集〔同右〕

細谷・木村家史料集〔同右〕

木村家史料集〔同右〕

長善館学塾資料目録〔新潟県立図書館〕

長善館学塾史料上・下〔新潟県教育委員
会〕

稿本勝山史料目録〔勝山市教育委員会〕

常陽の村落史料目録 下田中村稲葉信一
家文書・松塚村鈴木敏夫家文書〔立正
大学古文書研究会〕

谷川士清書簡集〔七里亀之助〕

江川漁業史〔田辺漁業協同組合〕

飛騨0寺院過去帳の研究〔須田圭三〕

東京の博物館〔東京都博物館協議会〕

蔵書目録 明治三十一年～明治四十五年
〔東京都公文書館〕

庁内刊行資料目録 一〇〔同右〕

御府内沿革圖書目録 三〔同右〕

富士川渡船郷秘史〔大村希堂〕

天半藍色―三木三百年の歩み―〔三木文
庫〕

寄贈民俗資料分類目録〔奈良県立民俗博
物館〕

概要書 七四・一一〔同右〕

北海道開拓記念館特別展目録 第十二回

日田市三十年史

藤沢市史 第五卷

淡翁鎌田勝太郎伝〔近藤末義〕

目でみる「にしきん」のあゆみ〔西日本
相互銀行〕

1975 Calendar 元禄〔増田正〕

日本生活文化史 七 西欧文明の衝撃

〔河出書房〕

一九七五カレンダー 日本の民具〔日軽アルミ〕

都史紀要 二十三

横浜市史 資料編十二・十三

上山市史編集資料 №10

戸田市文化財調査報告 VI

多摩川の昔のくらし展示目録・同資料

〔世田谷区立郷土資料館〕

開校百年〔猿島町立番掛小学校〕

草津宿場史〔草津市〕

台東区立一葉記念館しおり

世田谷区立郷土資料館のしおり

改訂住田の歴史〔岩手県住田町教育委員会〕

会

先人録〔埼玉県小鹿野町老人クラブ連合会〕

世田谷区略年表〔古代・中世編〕〔世田谷区立郷土資料館〕

近江史料シリーズ 一〔滋賀県地方史研究家連絡会〕

革嶋家文書について〔京都府立総合資料館〕

よしはま物語〔関藤不二男〕

改訂錦川志〔岩国徴古館〕

僧独立と吉川広嘉〔同右〕

東沢瀉〔同右〕

徳島藩の身分制の展開と賤民支配〔高市光男〕

おやへの古文書概説〔小谷部市〕

北海道戦後開拓史〔資料編〕

江戸商人名前一覧―江戸時代後期を中心とした―〔三井文庫〕

土屋氏の系譜〔土屋政一〕

語りつぐもの―永代家系記録―〔阪田泰正〕

四十年の歩み〔吾娣製鋼〕

滋賀県史 昭和編第二巻行政

日本の歴史 三〔集英社〕

特殊文献目録シリーズ 三・四・七・一

三〇一五〔一橋大学日本経済統計センター〕

国立国会図書館蔵書目録 第一〇四編

神奈川県関係新聞記事索引〔神奈川県立文化資料館〕

時雨庵文庫目録 付書名索引〔県立秋田図書館〕

栃木県史料所在目録 第四集〔栃木県教育委員会〕

日高町古文書資料目録 第一〇二集〔埼玉県日高町教育委員会〕

立教大学所蔵文書目録 二〔立教大学日本史研究室〕

労働省図書館蔵書目録 和書

横浜国立大学図書館目録叢刊 第五集

相模原市史資料目録

郷土史料目録〔多治見市〕

滋賀大学経済学部史料館所蔵目録 第一

三集

有馬家文書目録〔福岡県文化会館図書部〕

神奈川大学図書館蔵書目録和書・洋書・索引篇

蔵書目録〔昭和四十一年一月・昭和四十

八年十二月〕〔富士吉田市立図書館〕

静岡大学附属図書館蔵書目録

蔵書目録 第二巻・四巻〔鳥取大学附属図書館〕

往来本総目録〔三次図書館〕

東波波村役場文書目録〔宇部市立図書館付設郷土資料館〕

蔵書目録 第一・三集〔羽島市立図書館〕

郷土資料目録 第九集〔彦根市立図書館〕

〔群馬県〕 大胡町小史

〔秋田県〕 仙北村史年表

〔秋田県〕 仙北村郷土誌

〔新潟県〕 荒川町郷土史

輪島市史 資料編第三巻

東京都獣医師会史

奈良県教育百年史

鯖江市史 史料編 別巻地誌類編

〔福井県〕 三国町史料 村方記録

大村純忠公と長崎甚左衛門〔親和銀行〕

水戸学と明治維新〔常磐神社〕

東京都立中央・日比谷図書館案内

三木文庫要覧

阿波鑑譜史料編 上・中・下巻〔三木与吉郎〕

憲政記念館〔案内〕

高山右近の北摂キリシタン遺跡案内〔奥山康雄〕

明治天皇記 第十〔宮内庁〕

岩手の民俗図録 №1〔北上史談会〕

現代のエスプリ №84民具〔中村たかを〕

山形県教育史資料 第一巻

〔福島県〕 金山町史 上巻

山梨県議会史 第一・三巻

岡山県教育史 続編

世田谷区史料 第五集

伊予市誌

かわにし 川西市史第一巻

高知県立図書館山内文庫目録

北海道立図書館蔵書目録 第三・第六分冊

神奈川県民俗調査報告 一・三・七〔神奈川県立博物館〕

高知県行政資料関係目録 二〔高知県立図書館〕

第一回「高知県をわらう」展目録〔同右〕

浜田市誌 上・下巻

尼崎市史 第十巻

西尾市史 二

田島家文書 第二巻〔東京都教育委員会文化課〕

御殿場市史 第一巻

〔群馬県〕 粕川村誌

〔埼玉県〕 出雲山村氏考〔山村良夫〕

所沢史話〔所沢市〕

〔北海道〕 松前町史 史料編

県立長野図書館郷土資料目録 同増加目録

記録書 上・中・下〔滋賀県竜王町〕

鹿児島県史料 忠義公史料二〔鹿児島県維新史料編さん所〕

土浦市史編集資料 第二・三篇

市内遺跡分布調査報告 第三冊〔八王子市教育委員会〕

市教育委員会

市教育委員会

市教育委員会

市教育委員会

以下次号

昭和五〇年度 新収史料紹介 (一)

⑥はマイクロフィルムによる収集を示す

⑤長野県南佐久郡佐久町

旧海瀬村引継文書

本文書は前号で紹介したように、信濃国佐久郡下海瀬村土屋家文書の目録化に併行し、関連文書の一つとして調査収録したもので、明治期の市町村制施行によって合併成立した旧海瀬村が引き継いだ海瀬三カ村（上海瀬村・下海瀬村・海瀬新田村）の近世文書である。昨年度に所有者の佐久町当局の御好意によって当館に借用し撮影を行なったが、今年度はその残余の大部分の撮影を終了し、史料を返却した。

今年度収録にかかるものは、まず上海瀬村では、享保以降の年貢割付帳（七四冊）、をはじめ、年貢米高帳并金子請取、寛延以降の年貢米勘定帳（三八冊）、年貢金平均勘定帳（一八冊）、年貢取箇直段帳（一六冊）、年貢触当帳（一七冊）、年々引方帳（一九冊）、など年貢関係諸帳簿、廻状留帳（六冊）、享保以降の御公用小夫帳（四五冊）ほか諸夫銭・公用人足の割賦帳、山論、助

郷伝馬に関する諸帳簿、寛政一文化年間の公用日記帳などを主とする。

下海瀬村文書は、天明三年畑方合毛小前帳（六冊）のほか、地詰帳・差引帳など土地帳簿、割付写、貯穀・救恤、用水普請関係帳簿が多い。

海瀬新田村文書も用水普請のものが主である。

このほかに、土屋家文書中に写・控などが無い関連する一紙文書はできる限り収録したが、年貢割付（上海瀬村は免定）および皆済目録は、大量で撮影困難の故省略した。（原蔵者〓長野県南佐久郡佐久町。収録点数四五七冊・一九二通、三六リル〓二四、六九二コマ）

⑥上総国西尾家文書

花房西尾家文書

四九年度第一史料室「大名家文書の所在調査」にもとづく収集。西尾氏は、天和二年以来遠江国横須賀（現静岡県小笠原郡大須賀町）三万五千石の領主。明治二年忠篤のとき上総国花房に入封、廃藩まで続いた。

本文書の特色の一つは、享禄三年

初代吉次の代から忠篤の文久三年に及ぶ「家譜」（代々「御記拝稿」）類で、幕府への書上控ではなく、各

時期、代々の領知関係文書、財政・民政史料等も含む事蹟書で、他にいわゆる藩政史料が見当らない現在では、遠江時代の貴重な史料と言えよう。これに関連する冊子型の系譜類が本文書の大部分をなし、官位関係、藩知事任命状等も含まれている。次に、吉次の孫忠昭ついで忠成・忠尚三代を中心とした代々当主の直仕置書付類および初期の諸家書状があり、藩政史料としても今後の検討が待たれるものである。また四通だけであるが、文政八・安政五年の横須賀町御用達鶴田十右衛門宛藩借金証文があり、関連史料の探訪が待たれる好史料であろう。

今回は、同家のご好意によりご所蔵史料のほとんどすべてを収録することができた。ここに記して謝意を表する。（原蔵者〓千葉県松戸市本町一一二 西尾忠愛氏。総点数一一三・五リル〓二、九五七コマ）

⑥旗本山岡家文書

四九年度第一史料室「旗本家文書の所在調査」（本誌前号参照）の成果

にもとづく収集。同家のご好意により、ほぼ全史料を収録することができた。当家は近江国甲賀郡を発祥地とし、織田一豊臣、のち徳川家康に仕えた景友（通阿弥、九千石。但し内四千石は配下の甲賀衆給分）系で、景晴のとき嗣なく采地を収められたが、子宣友が原米三百俵を与えられて代々続き、番方にあることが多かった（前号、目付・佐渡奉行は誤記）。

代々先祖書・系譜類がまとまっており、天正一九・二〇・文禄二・元和三各年次の景友・景以等宛秀吉・秀忠の朱印状・知行目録、景友申置状（一幅五通）および書状類が、寛永・明暦・寛文年間前後の同族諸家書状とともに、幕府初期の旗本家成立事情をうかがわせる特色ある史料であろう。山岡一族の発展に密接なつながりをもつ三井寺光浄院・京都知恩院関係史料も、関連して利用しうる。他に、景福等の幕末・明治初年日録（山岡学校日録・開設書類とも）類、詠草類。（原蔵者〓千葉県市川市北方町四一一、七七七 山岡景恭氏。総点数約二五〇。三リル〓一、三三三コマ）

第二十一回近世史料取扱講習会開催される

九・十月、金沢・東京二会場

当館主催の表記講習会は、左記要項により二会場各四〇余名の受講者の参加を得て開催され、所期の成果を挙げて終了した。

〔開催要項〕

〔趣旨〕

公共機関などにおいて、近世史料を取り扱う事例の増大に伴ないこれに関する知識技能の向上が要請されている現状にかんがみ、当該関係者に近世史料の読解・調査・集収・整理・分類・保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、近世史料の保存、利用の効果を高める。

〔期間および会場〕

A、昭和五〇年九月三〇日（火）
～十月四日（土）石川県立郷土資料館

B、昭和五〇年十月二〇日（月）
～十月二十四日（金）国立教育会館

館

〔受講資格〕

図書館・史料館・博物館・研究所・史誌編さん室その他の機関

に勤務し、近世史料の整理および調査研究等に従事している者で、その経験年数の比較的浅い者。

〔講習題目と講師（敬称略）〕

A、金沢会場

- (1) 古代中世史料概論…専修大学 法学部教授 石井良助
- (2) 近世史料概論(Ⅰ)…竜谷大学 文学部教授 若林喜三郎
- (3) 近世史料概論(Ⅱ)…金沢大学 法文学部助教授 高沢裕一
- (4) 近代史料概論(Ⅰ)(Ⅱ)…神奈川大学経済学部教授 丹羽邦男
- (5) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔
- (6) 史料の保存科学…高松塚保存対策調査会委員 岩崎友吉
- (7) 史料読解(幕藩・村方・町方)
- (8) 史料の整理・管理
- (9) 史料の分類
- (10) 近世の遺物と遺習
- (7)～(10)…当館教官担当

B、東京会場

- (1) 古代中世史料概論…法政大学 文学部教授 豊田武
 - (2) 近世史料概論(Ⅰ)…東京大学 史料編さん所教授 山口啓二
 - (3) 近世史料概論(Ⅱ)…東北大学 文学部助教授 渡辺信夫
 - (4) 近代史料概論(Ⅰ)…東京大学 社会科学研究所教授 大石嘉一郎
 - (5) 近代史料概論(Ⅱ)…埼玉県立文書館行政文書課長 大村進
 - (6) 個別研究と史料の取扱い方法 専修大学経済学部教授 古島敏雄
 - (7) 史料の補修…宮内庁書陵部専門官 遠藤諦之輔
 - (8) 近世の遺物と遺習…国立民族学博物館助教授 中村俊亀智
 - (9) 史料読解(幕藩・村方・町方)
 - (10) 史料の整理・管理
 - (11) 史料の分類
 - (9)～(11)…当館教官担当
- なお、両会場では、いずれも座談会と施設見学(金沢市立図書館・国立史料館)を実施した。特に金沢では期間中、会場の郷土資料館の展示資料、市立図書館の加賀藩関係史料を閲覧させていただいた。

彙報

○昭和五〇年度事業(その一)

一、史料の収集

昨年度に継続して「長野県南佐久郡佐久町旧海瀬村引継文書」の、また「上総国花房西尾家文書」(大名)、「旗本岡家文書」のマイクロフィルムによる収集を行なったほか、「京都市東山区柏原家文書」(商家)などのマイクロフィルム収集を予定している。

二、史料の所在調査

長野市所蔵真田家文書の所在調査を、長野県史編纂委員塚田正明氏はかに委嘱し、当館職員三名が参加して本年八月五日より十一日まで実施した。ついで、秋田県大曲市角間川本郷家文書の所在調査を秋田工業高等専門学校教授高橋秀夫氏はかに委嘱し、当館職員一名が参加して本年八月十六日より十八日まで実施した。ともに当館所蔵史料の現地所蔵部分であるが、大量にもかかわらず相応の成果があり、目録を作成することができた。史料所蔵者各位をはじめ、担当者、参加者のご協力に心から謝意を表する。なお、調査の概要については別掲(六七頁)を参照されたい。

三、第二十一回近世史料取扱講習会実施
本年度の表記講習会は、九月三十日より石川県立郷土資料館において、十月二十日より国立教育会館において各五日間

開催された。(別稿参照)。実施にあたり会場提供をはじめ運営万般にわたってご協力をいただいた石川県立郷土資料館・金沢市立図書館・国立教育会館、および都道府県・大学等関係機関各位に本紙をかりて深甚の謝意を表する。

四、定期刊行物の発行

『史料館所蔵史料目録』第二十五集として「下総国相馬郡藤代宿飯田家文書」(本陣・名主)、同第二十六集として、「美濃国多芸郡高田町千秋家文書」(地主)を収録するほか、『史料館報』第二十三号(本号)。第二十四号を発行の予定。なお、『史料館研究紀要』第八号は本年九月発行、第九号は来年度発行を予定している。

○評議員会

本年度評議員会史料部会が、四月二十六日、当館において開催され、当館所蔵の民族資料の管理替えについて評議が行われ、昭和三十七年度に財団法人日本民族学協会より寄付移管された民族資料については、大阪府に新設された国立民族学博物館に管理替えすることが承認された。また、総会は、一〇月九日、国立教育会館において開催され、管理運営の概況、事業計画と進行状況、五一年度概算要求、庁舎の建築その他について評議が行われた。

○当館所蔵民族資料の国立民族学博物館

への管理替えについて

前記のように、昭和三十七年度に財団法人日本民族学協会より当館に寄付移管された民族資料は、今回大阪府に設立されている国立民族学博物館に管理替えとなり、本年十一月から逐次搬出している。したがって該資料についてのお問い合わせ等は今後国立民族学博物館になされた。なお、渋沢青洲記念財団竜門社旧蔵の旧日本実業史博物館の民俗資料は従来通り当館が所蔵している。

○人事移動

◇昭和五〇年三月三十一日付

退職 事務官 小野 義信

退職 (埼玉県立歴史資料館へ転出)

退職 輔佐員 木口 信子

◇昭和五〇年四月一日付

新任 輔佐員 内藤 真澄

新任 輔佐員 中田千代子

◇昭和五〇年七月一日付

新任 事務官 山田 哲好

文献資料部へ配置替 輔佐員 中田千代子

◇昭和五〇年一〇月一日付

国立民族学博物館へ転出

助教授 中村俊亀智

新任 助手 大藤 修

○文部省科学研究費交付

◇一般研究(D)三十一万円

自由民権期における徴兵忌避の

新改築にともなう

史料の閲覧利用について

史料の閲覧利用と密接な関係にある当館の新改築工事は、いろいろな事情で延び延びになってきましたが今年度は、本誌前号で予告したとおり、西館のうちの地下室部分だけの建設工事と同地下室の電気・機械関係の設備が実施されました。工事中は、閲覧利用の方に騒音や通路の不整備などによるご迷惑をおかけしたことをお詫びします。

来年度は、いよいよ西館の地上部分に着工され、年度末には完成できるものと考えられます。当館では、従前より、閲覧利用の方になるべくご不便をかけないように心掛け、本年度も史料

の全面的利用に应じて来ました。しかし来年度の工事では、三号書庫を取り壊さねばなりません。同書庫収納の史料のうち、印刷目録が刊行されているものや利用の多い史料などは、当分の間残置できることになっている他の書庫に移動して閲覧を継続する予定です。一部の史料は封鎖せざるを得ません。それらの史料は、西館建設と北館改修が完了する予定の五二年春からの全史料の移動作業が終了する五二年秋ごろまで封鎖が続きます。従って利用を予定している史料がありましたら、来年二月ごろまでにご利用下さい。ご不便が多いと思いますが、何とぞご了承下さるようお願いいたします。

実証的研究

—飯田事件を中心に—

鎌田 永吉

○編集後記

巻頭に相原隆三氏にお願いして長年にわたる氏の古文書調査・収録のご苦心をご執筆いただきました。氏は自宮のかたわら伊豆・沼津など各地の古文書を探訪筆写し、史料集として刊行されていますが、沼津市立駿河図書館発行の沼津本町資料は優れたものと思います。氏に厚く御礼申し上げます。

史料館報

第二十三号

昭和五十年十二月二〇日 発行

編集・発行

東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話(七八三)九一〇六(代)

印刷所 株式会社三協社

東京都中野区中央四六一六

電話(三八三)七二八一(代)